

講演 概要

遠藤周作の「歴史小説」について

長濱 拓磨

拙著『遠藤周作論―「歴史小説」を視座として―』（和泉書院）において私が試みたのは、遠藤作品の過半数を占める「歴史小説」を整理すること、遠藤文学を見直す新たな視点を見出すことであった。これが成功したかどうかはともかく一つの問題提起にはなったと思う。そこで、今回は拙著の試みを少し深めて、遠藤周作の「歴史小説」の世界を考察していきたい。考察の対象となるのは、拙著で分類した「歴史小説」の三つの時期（序章を含めると四つの時期）である。次のとおりである。

序 「歴史小説」への序章―「トポス」をめぐる「手記」―

第一期 「歴史小説」―「切支丹物」の世界―

第二期 「歴史小説」―「評伝」の世界―

第三期 「歴史小説」―「歴史群像」の世界―

まず序にあたる「歴史小説」への序章では、初期作品における「手記」の問題を中心に考える。「アデンまで」「白い人」「黄色い人」「海と毒薬」「わたしが・棄てた・女」などにおける「手記」形式の意味を探りたい。

第一期の「切支丹物」の世界では、柴田錬三郎『狂四郎無頼控』、堀田善衛『海鳴りの底から』、小島信夫「殉教」、井伏鱒二『かるさん屋敷』『安土セミナリオ』など同時期の切支丹物とあわせて『沈黙』を考える。

第二期の「評伝」の世界では、この時期の作品群の取材ノートである『走馬燈』を中心に考える。『走馬燈』では「トポス」の問題が明確になっており、『鉄の首枷 小西行長伝』『銃と十字架』『侍』などの作品背景となるそれぞれの場所に作者が出向いた記録ともなっている。しかも、『イエスの生涯』『キリストの誕生』『死海のほとり』にも言及されており、イエス・キリストの評伝の重要性を垣間見ることが出来る。

最後に第三期の世界では、『侍』の二項対立の世界から『女の一生 第一部 キクの場合』の二項対立の世界への展開、及び『深い河』につながる心理小説の問題を考えていきたい。

以上の考察を通して遠藤周作の「歴史小説」が綾なす多彩な作品世界を考察していきたい。遠藤文学を再考する機会となれば幸いである。

研究発表③ 概要

遠藤周作『彼の生きかた』論——メタファーの破れ目をめぐって——

関西学院大学非常勤講師 吉川 望

『彼の生きかた』（産経新聞 一九七四年三月二日～二〇月二日）は、野生の日本猿研究者で、吃音の障害をもつ主人公福本一平の半生を描いた作品である。先行研究としてはまず、高橋正雄氏に、「文学に見る障害者像」という視点から弱者としてより弱い存在である猿を助けようとする一平の姿を指摘した論稿（『彼の生きかた』——吃音の動物学者——「ノーマライゼーション」二〇〇四年六月号）がある。さらに神谷光信氏に、『死海のほとり』のクライマックスの描写との類似性から一平に〈同伴者イエス〉を見出し、一平が猿という動物に寄り添う点において、トマス・カトリック的世界観への違和感を背景とした遠藤の宗教的メッセージを読み取る論稿（遠藤周作「彼の生きかた論」『キリスト教と文化』二〇一五年三月）がある。また発表者は拙稿（遠藤周作『彼の生きかた』についての断想——寂しさの芯に触れて——「始更」二〇一八年一〇月）にて、弱者と強者の構図や〈同伴者イエス〉としての一平のありかたではなく、猿たちに寄り添う一平の選択自体に作品の主眼は置かれているとする見解を述べた。

本発表では、〈同伴者イエス〉が一平像に託され、作品の主要なテーマを形づくっているとする見方を前提としつつ、そのメタファーの破れ目をめぐって考察したい。周知のとおり遠藤は、愚鈍なまでに純朴な登場人物が、自分より弱い者の苦しみを分かち持とうとするさまを繰り返し描いている。『おバカさん』（一九五九年）のガストン、『わたしが・棄てた・女』（一九六三年）の森田ミツがその例である。そして『死海のほとり』（一九七三年）、『イエスの生涯』（一九七三年）において、『おバカさん』で芽吹いた〈同伴者イエス〉像が明確に打ち出された。『彼の生きかた』の一平もまた、その行動やかたから確かにガストン、ミツに連なる者である。しかし、二人とは大きく異なる点もあるだろう。それは、救おうとする弱者が動物であることであり、人間の世界への決別が示されていることである。人物と〈同伴者イエス〉のイメージの重なりにおける他とのずれを、本作品におけるメタファーの破れ目とするならば、そこにはどのような意味が表れ出ているだろうか。一平の描かれ方を、人間と決別して動物と歩むという選択に注目して分析することで、『彼の生きかた』が〈同伴者イエス〉を描きながらも、別様の問いをはらむものとなっていることを明らかにしていければと考えている。